

出雲、文三郎の大變革

忠臣藏初興行の騒動

近松門左衛門逝き、政太夫の竹本播磨少掾歿後の淨瑠璃界は、當然の歸趨でもつて、その實權が作者としての奇才、興行主としての辣腕家たる、竹田出雲の手に移つてからは、淨瑠璃界に大きな變轉を見せてきたことは是非もないことであつた。すでに十五歳にして竹本座の座主であつた（父竹田近江の後見はあつたにせよ）出雲は、長ずるに従つて十二分の經驗に加ふるに、殆んど天才的手腕をもつて縦横に飛躍したのである。さうして道頓堀の黄金時代、古今無比の淨瑠璃最盛期を現出したと傳へられる。

延享版の「淨るり譜」は、

此頃操り流行して歌舞伎は無きが如し、芝居表は數百本の幟、進物等數を知らず、東豊竹、西竹本、と相撲の如く東西に別れ、町中近國ヒイキをなし、操りの繁昌言はん方なし。

と云ひ、又寶曆版の「竹豊故事」には、

操り繁昌し東は西に負けじ、西は東に勝たんと互ひに勵み出来、益々芝居繁昌し、淨瑠璃の作者種々様々の趣向をあみ出し、道具立衣裳に金銀を惜しまず、美麗を盡し、町中の若い衆、豊竹講、竹本講と號し、毎月掛け錢を集め置き、替り淨瑠璃の節進物の入用に仕玉



竹田出雲の像

ふとかや、偕々奇特千萬なる心中益々信仰をさるべし。

と云つてゐるところをもつて、略ぼその盛觀を祭ることが出来る。されば淨瑠璃界に非常な一轉機を起した傑物出雲の作品を通じてその興行ぶりを見てみよう。作者としての出雲は近松在世のころ、享保八年二月、三十三歳の時、松田和吉との合作で「大塔宮職鑑」を書き、近松の添削を乞うて、その處女作を發表し、その二度目には（同年十一月）「櫻町名花昔」といふ世話物を書いたが、これは失敗に終つて發表をしなかつたばかりか、後眞世話物は書かぬと決心をしたとの事である。

さうしてゐるうちに近松が死んだが爲に、いよいよ彼は筆を揮はねばならぬ時機に達し、享保十年九月には『大内裏大友眞鳥』の作を發表して大好評を取り、眞鳥の本と鼠の糞は何處の家にもあると云はれる程に、一時に文名が高まつた。ましてや敵方である東の芝居の豊竹座の作者紀海音が、享保八年七月『傾城無間鐘』を終りとして引退してしまつたので、勢ひ彼の時代が到來したわけである。

「忠臣藏」「千本櫻」「菅原」「双蝶々」「平假名盛衰記」「小野道風」「凱陣紅葉」「大塔宮」(以上合作)。「大友眞鳥」「五鴈金」「芦屋道滿」(以上單獨作)の十二篇を始め、その他二十二篇の、現代に尙ほ生命のある各作品を見ても解る通り、從來の近松時代の淨瑠璃本位に比して舞臺は著るしく人形本位に傾いて來た、即ち歌舞伎化されて來たのである。言ひ換へれば耳に聽いて味ふ藝術が、目に訴へて大衆を迎ふる藝術に變化して來たのである。いふまでもなく興行主であつて作者を兼ねた彼れが、當然執るべき道であつたのである。而かもこの傾向は非常な社會の歡迎を受けたので、出雲の技能は人形遣ひ吉田文三郎の卓抜な技倆と相俟つて、新しい形式をどしどしと試み、觀客をして應接に邊なからしめてゐる。さうして淨瑠璃界と歌舞伎界の双方へ向けて多くの貢獻を遺すことの出來たのは偉とせねばならない。その

新形式の重なるものを記してみる。

○人形の舞臺を重要視して、從來正面に在つた大夫の床を左遷し、舞臺全部を提供してよいよ大道具大仕掛け人形活躍の便宜を謀る、時に「加賀國篠原合戦」上演……享保十三年五月。

○人形の指先動く仕掛けにする。「車返合戦櫻」の大森彦七……享保十八年四月。

○従來は突込みと稱して兩手で人形を差上げて遣つてゐた式を改め、現在の如き三人遣ひとする。「芦屋道満大内鑑」の興勘平、彌勘平の腹ふくらし……享保十九年十月。

○人形の肩動く仕掛けにする。「赤松圓心縁陣幕」本間入道の眉……元文元年二月。

○寫實式の舞臺。「夏祭浪花鑑」本水本泥を用ふる試み、帷子を人形に着せる……延享二年七月。

○人形の耳動く仕掛けにする。「義經千本櫻」忠信狐……延享四年十一月。

○能囃子を用ふ。「戀女房染分手綱」五ツ目。道成寺の所作……寶曆元年二月。

以上大要。(尤も吉田文三郎との合作案も含む)

出雲が生涯の大事件として、人形が如何に重要視せられたかといふ一例證として、はたまた

藝界の一佳話として、而かもそれがお馴染の「假名手本忠臣藏」の初興行にからまる大騒ぎだつたのだから、悉しく説く必要がある。竹田出雲、三好松洛、並木千柳が京都の歌舞伎澤村宗十郎座の「大矢敷四十七本」といふ義士の芝居を見て、すぐ三人が合作で書き上げた「假名手本忠臣藏」が竹本座に上演されたのは、寛延元年八月十四日からのことだつた。その忠臣藏があらゆる澤山の義士復仇の芝居を出し抜いて百九十餘年を経た現今まで、いまだに歌舞伎や浄瑠璃の獨參湯と稱されて上演せられてゐるほどだから、書卸しその當時の人氣も推して知るべしである。これは開場して或る日のこと、こゝにゆくりなくも一騒動が持ち上つて來た。人形の頭領吉田文三郎はいふまでもなく由良之助の人形を遣つてゐた。その文三郎が九段目の山科を語つてゐる太夫の槽下竹本此太夫（後に豊竹筑前少掾）の部屋へぬつと現はれて來て、

先達てから申し入れたく思ひ居しが、ついつい差控へ、言ひおくれたれど、打ち明けて申し談じたき儀あり……。

とかういふ前置きで、舞臺上の相談にやつて來た。その相談といふのは、山科の場で由良之助が本藏に向つて本心を明かし、師直邸に忍び入り用心の兩戸を外づす考案を實地に示す條、「仕様をこゝに見せ申さんと庭に……。」といふ語り口を、今少し間を伸して語つて貰ひたい、

さうでないとは由良之助が庭に下りて駒下駄を履き、竹の傍まで行く間の動作がどうも忙しくていけない、思入れも充分に出来ずどうも遣ひ苦しいから……。

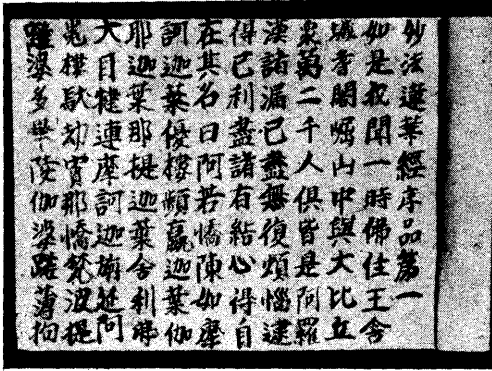
とまあ頼み込む體裁で喋つたと思はれる。

ところがこの相談に對して、此太夫は、もう今までに日數も可なり打續けて來てゐる、いまさら節や時間を變更することは出来ない、元來かういふことは初日に語り定めた以上はどうにもなるものではない、初日同然幾日経ても語り口に狂ひの無いのが私の生命なのだから、それをかゝると變更するやうなことがあつては第一私の藝の信用に關はる、だから残念ながら此御相談には應じ兼ねると、判然と突きはなした。かう云はれると、文三郎とて一旦云ひ出した言葉の上、黙つてそのまゝ引込んでしまふ譯には行かない。そればかりか實際この「庭に」の條には思ひあくんだのだから思案の變へようがない、だからもう一度強く、而かもすこし皮肉を交せて、さう貴君は云はれるだらうと思つた、實は私も今日まで貴君の方から此ことに氣付いて言ひ出してくれるだらうと心待ちに待つてゐたのだ、元來櫓下の責任者として名ある此太夫ともあらうものが「此場合定めし人形は遣ひ難くからう」といふぐらゐの察しがつかないとは……。とすこし喧嘩腰だつたから憎まれ口を利いた。此太夫とて藝術上のことで一旦吐い

た自説は平生の信條に對しても俄に枉げるわけには行かないのである。改める、改めない、といふ押問答で、結局互ひに血相を變へて云ひ争うたが、どうにも解決がつかない。このことを聞きつけて座主の出雲と二代目の政太夫、三味線の友二郎等が仲に飛んで入つて、とりあへず、まあまあと二人を無理に辭めて、懇々と双方の云ひ分を聽いて見たが、どちらも頑として主張を枉げようとはしない、それで言ひ分が通らねば明日から休座すると、二人共佛然と歸つて行つた。サテ困つたのは出雲である。どちらか一方が折れてくれなければ明日の芝居を開けることが出来ない、さうしてどちらの主張にも道理があるのだからちよつと厄介だ。

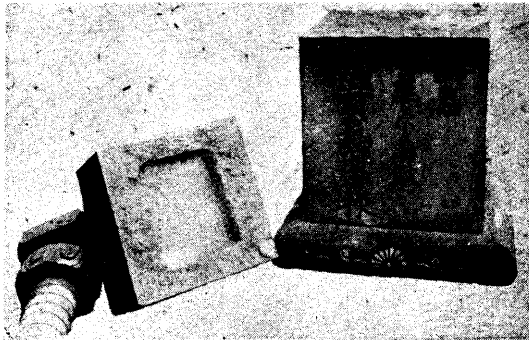
そこで出雲はその善後策を協議する爲めに一座の重なる關係者を、閉場後の樂屋に召集して、所謂秘密會議を開いた。かういふ會議といふものは、いつの場合でも同じやうに、喧々囂々として、なかなかまとまりのつかないものであることは誰れにも經驗のあることで、凡そは想像出来るが、結局は座長たる出雲の裁決に一任すると云ふことになつたらしい。そこで結局出雲の案としては、文三郎は當時竹本座を背負つて立つ唯一の人気者、ことに今度の人形は宗十郎以上の至藝で神業とまで稱讃されてゐるから、此太夫といふ名人を失ふのも惜しいには惜しいが、どうも文三郎を失つては竹本座全體の損失が大きい、だからもう一度此太夫に讓歩を勸告

して、萬一承知をしない場合は休場をさせるより致し方がない。此決議案は早速此太夫の方へ通知されたが、道が此太夫だ、すぐに休場を快諾して、己れの藝の自信



部一經寫筆真揀少前筑たし見發りよ中碑肥下

を重んじて竹本座槽下の名譽を古下駄を捨ててやうに捨ててしまつた。これでこの問題は先づ解決したが、あとの問題は此太夫に代つて九段目を受持つ太夫を選定せなければならぬことである。これも可なり大問題だ。出雲は頭を悩ましたが、ふと



圖の體解付に轉移碑墓(夫太此)揀少前筑

立派な候補者が思ひ當つた。それは竹本座の創立にもつとも縁故の深い故内匠理太夫の實子、豊竹上野少掾である。出雲は早速駈けつけて、情理を盡して竹本座の浮沈に關はる大事の場合、是非出場を承諾して貰ひたいと懇願した。上野少掾も出雲の熱誠に動かされて半ば承諾をしたが、その前に一應此太夫と會見をしたいと云つた。そこで早速此太夫に通じて、日本橋一丁目の出雲の宅で三人は會見した。上野少掾は此太夫に向つて竹本座引繼ぎの挨拶を述べた、此太夫も快よくこれに答へ、さうしてお互ひに九段目の作意やら語り口など語り合ひ、恰も百年の知己の感があり、好都合に運ばれて行き、どうやら無事に濟んだ。出雲はほつと吐息をついたのである。これだけの波瀾重疊が、たつた一夜の中に出雲の努力で收まつたのである。かうして竹本座は幸ひに休場をせずして打ち續けることが出来、これが間もなく市中の評判となつて一層の好人氣、上野少掾は竹本大隅掾と改名して、これも甚だ好評、興行日數の積む程に益々人氣は騰るばかりである。何か幸ひになるかわからないものだ。さてこの問題に關聯して大隅掾や此太夫の人格を物語るべき美しい挿話がある。

大隅掾は此太夫に代つて九段目と七つ目の掛合ひの由良之助を勤めるのだが、竹本座で用意をして置いた出版用院本の原稿を見ると、七ツ目掛合の由良之助は□の中に大の字を入れ、因

とあつて、ちやんと大隅の名に代へられてゐる。これを見た大隅は斷然これを拒んで、かう云つた。自分は途中代り役として勤めてゐるのである、院本は末代まで残る大切の記念だから、假令此座を退座して行つても、當然此大夫の名義を用ひなければならぬ。とかういふ理由で急に因の字を削らせて圃の字に改めさせた、謙讓の人で無くては出来ない業である。現存七つ目の院本由良之助役に圃の一字が入つてゐるのも、かうした美談がたつた一字に含まれて永く斯道の人々に大きな教訓と暗示を與へてゐる。

さうして一方此座を退いて行つた竹本此大夫はどうなつたかといふと、これは人々の勧めにまかして、門人島太夫、百合太夫などを率ゐて、東の芝居豊竹座に轉じて櫓下に据つたが、これも飽くまで善意で酬いて、わざわざ竹本座の『忠臣藏』の終るのを待つて、同年十一月十四日初日で『搦州渡邊橋供養』を上演してゐる。ところが此方も脱退一件や此大夫の人格や何かで市中の噂となつてゐるだけに、意外な人氣が集まつて翌年の三月まで五ヶ月に亘る大入滿員といふ芽出度さである。かういふ次第で、興行界は時に空氣を新鮮にする爲めに入れ替へをしなければいけない、といふ先例が作られて、その後の兩座へは、時々太夫の入れ替へが行はれてゐる。この東西兩座の出方が混亂すると云ふ事は此時が始めて、古來の一座固定式が自ら打

破された譯である。

二百年の後までも、絶え間なく、多くの見物を騒がして來た「假名手本忠臣藏」は、先づ初興行からして、かうした大きな記録的印象を遺したのだつた。此時、出雲五十八歳、此太夫四十九歳、大隅四十七歳、文三郎は五十歳前後であつた。さうして大隅、此の兩太夫の人格、武士的態度の立派さは「忠臣藏」の義士劇と共に、いついつまでも輝いてゐるのである。

出雲の略歴を摘記する。

元祿四年大阪に生る。(江戸説もある)寶曆六年十一月四日歿す。(行年六十六歳)幼名三四郎。後清定。號千前軒(千日寺の前の義、住宅から名付く)。定紋、竹の丸に九枚笹。立慶町、吉右衛門町(いづれも道頓堀)兩町の年寄役を勤む。墓地、生玉寺町青蓮寺。法名、文明院峯松立顯居士。門人、小出雲、吉田冠子(文三郎)、竹田正藏(爲永太郎兵衛)、竹田外記、竹田瀧彦、竹本三郎兵衛、竹田因幡、竹田和泉、竹田平七、竹田伊豆、竹田土丸、二步堂、松田和吉、その他。

竹田出雲の股肱となつて其大業を援け、此太夫と覇を争つて自ら重きを爲した吉田文三郎は、一面吉田冠子の名を以つて之れ又淨瑠璃の作をのこしてゐるところを見ると、精力家であると

同時に、よほど卓抜な技能をもつてゐた人には違ひない。人形藝術の上に文三郎の發案として現にそのまゝを踏襲してゐる幾つかの例を擧げることゝ出来るが、床の淨瑠璃が歌舞伎式になると同じやうに、文三郎の人形も當時としては随分寫實風になつて來たのであらう、その爲め人形の世界に新しい境地がずんずん見出されて行つたのである、たしかに名匠には違ひなかつた。「夏祭浪花鑑」で始めて人形に帷子を着せ、お辰の扮装、桔梗の帷子、黒縹子の前帶、淺黄綿帽子など後世にその型を傳へた如き、或は「義經千本櫻」の道行で狐忠信の耳を動かし、黒地に縫金の源氏車の模様を考案し、また「忠臣藏」の由良之助に二つ巴を付けた。そんな例は擧げればきりが無いほどである。

文三郎の人形には人間の魂が躍動してゐると傳へ、それが一つの怪談噺になつてのこつてもゐる。おふじみの五大力の狂言のその元の菊野殺しの芝居についてゝある。「薩摩歌妓鑑」といふのが本題である（近松半二や吉田冠子即ち文三郎等の合作）。主人公の早田八右衛門が、嫉妬に燃えて、血刀を提げながら、四邊を探し廻はる途端、すでに殺されてゐた藝妓菊野の死骸の疵口へ片足を踏み込み、爪先に腸を引かけてひき上げる料がある。如何にも寫實で眞に迫つてゐて凄慘の氣を喰る場面である。晝間文三郎によつて魂を吹込まれた八右衛門の人形が、

夜になつて人静まつた時、ひとりにて文三郎に遣はれてゐる通りをくりかへし、時には結び上げた髪を振り亂して大荒れに荒れ狂ふ。朝になつて樂屋へ入つたものは此容子を見て膽をつぶして驚く。又或時は肌脱ぎになつて大刀を抜いたまゝ、さも疲れ果てたやうになつて樂屋の入口に倒れてゐる。或る小屋番は彼の人形が一人で闇をさぐりながら歩いて行くので、後をつけて行くと、流し場へ下りて水甕に首を突つ込んで舌鼓を打つて水を貪り飲んだ。かういふ風にその當時のことが、さも實際に見て來たやうに傳へられてゐるが、眞偽はどうでもよい、文三郎の人形が如何に如實に人間そのまゝの動作をもつて見物に迫つて來たかといふことが想像出來ればよい。(但し此等が有名な逸話となつて傳へられてゐるが、私は文三郎でなく、桐竹門三郎ではないかと思つてゐる)